

本多謙三著

『哲學と經濟』

坂田太郎

經濟哲學は未だ至つて稚ない學問であると云はなければならぬが、故左右田博士の輝しい業績が、吾が國學界の異常な關心を喚び起してからでも、早や相當の年月が経過してゐる。左右田博士の業績が、吾が國の學界に及ぼした影響は、非常に廣く且つ深いものであつて、ひとり經濟學界に限らず、一般に文化科學及び哲學に關心を抱くものの中に、かなり根本的な反省の機會を與へたことは、未だ昨日のこのように、なまなましく思ひ起される。然しながら、左右田博士以後に於けるこの領野の開拓は、一時行き詰つたような感じを懷かせてゐた。それにも色々な事情を思ひ合せることが出來よう。その根本的なひとつは左右田博士の業績の影響が著しかつただけに、それは大き

な異論——經驗科學の哲學的反省は、毫もその科學の内容を増すものでないといふ異論——に逢着したことであると思はれる。大體科學の内容といふことからして問題であるが、然し今日でも尙相當廣く流布してゐるように見えるこの異論も、決して無根據なのではない。確かに、ひとつの支點をもつてゐる。だが學問の專業化の風に、必要以上に泥んでゐると思はれるこの見解に對して、長い間、正面から、些かの検討も加へられなかつたように見えたことは經濟哲學そのものの學問的無力をさへも思はせたらしい。だがそれは兎も角として、少數ながらもこの領野の開拓に志して、大なり小なり努力を傾注したひとの中には、直接左右田博士の學問的薰陶を受けた人や乃至は一橋にゆかりをもつひとが尠からず含まれてゐた。それがため、少し云ひ過ぎかは知れぬけれど、經濟哲學といふ學問は、左右田博士以來宛も商大の御家學ごけがくの様な觀を呈して來た。經濟哲學的な研究方向は、商大の學問の著しい特色の一つを形造つてゐるといふ印象は、今でも世間にかなり根強いと思はれるがどうであらうか。

勿論左右田博士の遺された業績は、現代の學問的自覺の狀況から考へて、そこに尙ほ學ばるべき多くのものを含んでおりながら、更に原理的に検討せられ、精練せられ、或は棄てらるべきものをも包含してゐることは、多くのひとの認容するところであらう。先師の業績の不斷の精練こそは、却つて、比類なきほどに學問的精神に徹しておられた左右田博士の究學のこゝろを、生かすものと云はなければならぬ。この點からして、最近世に贈られた杉村博士の業績と、本多謙三氏の遺著とは、それぞれ違つた意味で、左右田博士の故志を見事に生かしてゐると思ふ。久しぶりにこの學問にも、躍動が見られたように思ふ。尤もその生かし方は、それぞれ異つてゐよう。杉村博士の場合には、左右田博士が論理的に闡明せられた超越的な經濟的文化的價值を、內在的に裏付けることに、仕事の重點が置かれた。その仕事はそれゆゑに、その性質から見て、カントがとくに第一批判の第一版に於て企て、更にはリッケルトがその「認識の對象」の第二版に於て試みようとした超越的價値の先驗心理學的具象化の仕事に、擬らへることが出来ようかと思ふ。つまり左右田博士と等しく、カント主義の精神に植さしながら、否むしろそれに徹しようとして、超越的價値の事象性からの遊離を救ひ、價値と事象との疎隔の危險を矯めようとしたところ

に、杉村博士の業績の中核が横つてゐた、と見ることが出来るのであらう。それならば杉村博士と同じく、左右田博士の薫陶のもとに生ひ育つた本多氏は、どのような方向を迎へることによつて、先師の故志を生かさうとしたのであらうか。

× × ×

吾々は本多氏の唯一の纏つた遺著「哲學と經濟」を手にして洵に云ひよのない感慨に打たれるのである。それは強ち筆者が、本多氏を身近に感じてゐたといふ個人的事情にのみよるとは云へぬであらう。有體に云へば、吹田先生たちの御骨折で、生前の遺稿の主なものゝ纏められ、世に贈られたといふことは、本多氏の生前を知る者には、何としても喜びでなければならぬ。けれども、とり纏められた形でこの遺著に接するものは、恐らく若干充されぬ心を持たざるを得ぬであらう。——それにして、本多氏の夭折を惜しまずにはゐられない。讀者の期待したところのものは、遺著によつては遂に十分には與へられないからである。恐らく多くの讀者は——筆者と雖も同様である——本多氏が數年前から病弱の身を鞭打つて、その完成に精根を傾けてゐた「經濟と哲學」の成果に、尠からぬ期待を寄せてゐた。一體本多氏はどう云ふ仕事をやり遂げるだらうか。同氏の天稟と鐵のような意志とを知るものは、單なる好奇的な

氣持からではなしに、同氏の仕事に眞摯な關心を寄せてゐた。不幸にして中途病に殞れたがために、その仕事は完成を見ずに済んだけれども、しかし吾々はその未完成の遺稿に、なほ一縷の期待を繋いでゐた。同氏が志を遂げずして殞れたことは、いくら惜しんでも足りぬが、然し同氏の纏つた仕事は、相當進んでゐたに違ひない——だがこの期待は、ほんの一部分しか充されなかつた。とは云ふものの、よく考へて見れば、吾々が同氏の仕事の相當の進捗を待ち設けたりしたのは同氏の血の滲むよるな心の苦闘を察しない第三者の蟲のよさからだつたのではあるまいか。さう思ひ至ると、吾々は疎然としてしまふ。いくら照勉撓まぬ本多氏でも、死病と眼のあたり闘つてはこれ以上の進捗はなし得なかつたのであらう。寧ろ、この世の人とも思はれぬ肉體を抱いて、よくもこれ迄の成果を擧げ得たもの——吾々はその苦闘の前に、頭を垂れ、沁々とその成果を思ひ見るべきなのであらう。

斯くして本多氏が生前の幾年かに亙り、その勢力を傾注してゐた「經濟哲學」は、ほんのトルソーとしてしか残されなかつたけれども、遺著「哲學と經濟」には、初期のものから後期のものに至る中で、比較的代表的なものと思はれる論稿が集録されておられ、今さら同氏の過去の業績を偲ぼうとするものにとつ

ては、まことに貴重なドキュメントである。それが「經濟哲學」とはならず、「哲學と經濟」に畢つたことは、返すがへすも残念であるが、然し眞理は結果に於てよりも、寧ろ過程のうち存すると云はれるように、吾々は同氏の、時に當つて種々な意圖のもとに書かれた眞摯な諸論稿のうちから、限りなき示唆を見出し、懦夫をして起たしむるていの眞理への情熱を、汲みとり得るに相違ない。その論旨は、必ずしも齊一であるとは云へぬ、また多分に時代的關心に引きづられてゐると感じられる個所もあるであらう。然し吾々はむしろその點にこそ、著者のひたむきな構えを見取らなければならぬ。本多氏はその前書きに——この前書は、生前幾つかの隨想をとり纏めて公刊を志したとき、その序文に充てるべく書かれてあつたものだと云ふ——つぎのように述べてゐる。「私は従來、一定の計畫に従つて執筆することをしなかつた。これはさうすることが出来なかつたからであらうが、體系的に體裁を整へることは、思想が十分に成長してからでよいと教へられ、自らもまたさう信じたからであつた。問題はその提起された時と關係とに應じて答へられるとき、最も潑刺として取扱はれる。論者の立場や態度といふものも、多くの變化ある問題に接して、それ等を處理してゆく間に、おのづから培はれるのだと思ふ。そしてそこに

何らか一貫したものが観られ、問題それ自身も自然な分岐と組成とを示すように到るなら、ここにこそ巧まざる體系が生ずるといひ得よう。」著者はなにも、一定の體系的意圖に基いて、これ等の諸論稿を執筆したわけではなかつたのだ。ひたむきな時代的關心からして、おのが思索をもつて、敢然と世に處しようとしたのだ。そこにおのづから一貫したものが出来上つて來ることは、著者の待ち望んだことであつたけれど、それが目當てゝはなかつたのだ。だからして吾々は初期の論稿から後期の論稿に至る間に、著者の立場も幾變轉を重ねてゐることを知り得よう。然しそれ等の幾變轉を貫いて、吾々は各論稿の行間に滲み出でゐる著者の如何にもひたむきな眞理への情熱を、感得せぬわけにはいかぬであらう。著者の示した成果は兎も角としても、この抜き差しならぬ心ばえに貫かれてゐることは、何といつても、この遺著の身上と云はるべきであらう。

× × ×

却説筆者は、ともすれば感慨に耽らうとする心を抑へて、この書評に締め括りを付けねばならない。取り纏められた論稿は大體發表の年代順に従つて配列されようとしたらしいが、その方針は嚴密には踏襲されてゐない。然し讀者は卷末に附せられた年譜によつて、各論稿の發表年代を知ることが出来、それを

通して、著者の學問的苦闘の跡を辿ることが出来るであらう。

初期の諸論稿が、著者の深き現象學的理解を示してゐることは、學界に既に定評がある。その精緻な行論は、著者の緻密な頭腦を示すとともに、如何にもよく、著者の篤實な學風と、いやしくもせぬ爲人とを映し出してゐる。最も早く發表された「貨幣の存在論」——發表當時の名稱は「貨幣理論の現象學的考察」——は、現象學的立場から貨幣理論の闡明を志したものであるが、この論稿は恐らく、幸ひに筆者の思ひ過ごしでなければ、著者のカント主義から現象學的立場への推移を示してゐる思想的記念碑と見られるのであらう。さう思はせる理由が、確かに存在してゐるように思ふ。著者は多分、左右田博士の影響のもとに、カント主義から出發して、現象學的立場に移つて行つたのであるらしい。而もそれは單に趁つたと云ふのではないに、もつと切實なものがあつたようである。すなはち本多氏は、超越的價値の内在的充實の論理として、現象學的方法こそカント主義の目指すところを全からしめ、批判哲學の精神の發展と見らるべきものと考へたようである。この論稿に於ける著者の現象學的理解は、著しくカント主義に引き寄せられてゐる。従つてカントの第一批判に於ける先驗的演繹論の企畫なども、寧ろ現象學的研究と名付けられてよいものであり、現象學

的本質記述の方法によつて、カント主義に立脚する左右田博士の立場を一層具體化し發展せしめようとしたのであるらしい。貨幣を經濟財の理念、本質として經濟價值を指示するものと見たこの論稿の歸結が、果して著者の謙遜して述懐してゐるようにならば、左右田博士の「信用券貨幣論」の所論の一步も出てゐないかどうかは別に検討を要すると思ふが、吾々は本多氏が、どのような方向を辿つて、左右田博士の業績を精練しようとしたかを、充分に窺ふことが出来るように思ふ。方向こそ異なれ、その動機に於ては、杉村博士の場合と同じものがあつたのだと思ふ。次いで發表せられた「貨幣に於ける社會性と歴史性」に於ては、著者の現象學的理解は一段と深められて行つたが、この論稿では、左右田博士に於ける評價社會が、現象學的に見られるところと興味がある。

その後著者の立場は、解釋學的現象學を介して、辨證法的立場に結び付いて行つたが、後期に於ける立場を特徴付けてゐるのは、キエルケゴール風の實存辨證法である。その推移の模様は、たしか「思想」に發表せられた現象學と辨證法などによく表れてゐたと思ふが、この論稿はこの論文集には収録されてゐない。然し論文集に収録されてゐる「具體的思考と抽象的思考」及び「表現としての身體と實存としての身體」は、ゆたかに後

期の立場を表明してゐる力作である。立場の推移はあつたけれども、初期の現象學的理解は、實存の論理を組み立てるに當つても、仲々魅力ある肉付けをなしてゐるように思ふ。さるひとが述懐をして、著者の思想傾向は現象學に最も近かつたように思ふと云つたが、學徒として生涯を通じて見れば、成る程そのような感じも湧いて來る、ごく自然に。

嚮にあげた二つの論稿に盛られてゐる生の論理、實存辨證法の展開は、著者の學徒としての最後を飾るに適はしい勞作であり、必ずや吾が學界に寄與すべきことを信じて疑はぬが、著者はこの實存の論理を土臺として、「經濟哲學」の構想を練つた。生活を生活に即して理解しようとする立場は、經濟哲學に於ては、經濟生活によつて經濟生活を釋かうとする抱負となつて表れてゐる。従つて經濟哲學は、經濟生活そのものの構造に應じて、自らを顯はにさせる生活の自己理解でなければならぬ。ところで生活を經濟的たらしめてゐるものは、生活の外に、それを超えてあるものではなく、廣く生活一般の底から浮び上つて來るものでなければならぬ。生活の構造のうち、自ら經濟的なるものの方向が定められる。けれども實存の論理、生活の自己理解としての哲學の立場は、經濟哲學に於て、單にその論理の適用を見るものであつてはならず、却つて他の道途に於ては

達し得られなかつた獨自の視角と轉向と仰望とを、それによつて、與へられるのでなければならぬ。論理の單なる適用を志すものでなく、經濟生活に沈潜し、生活を包む雰圍氣を味ひ、生活の動きを匂きだすことこそ、直ちにこの領域に於て哲學することを意味するのでなければならぬ、と云ふ。この熱情的な抱負は、「經濟哲學序論」に盛られてゐる。それは殘念なことに、單なる序論に畢つてしまつたけれども、著者の意向は、はつきりと汲みとることが出來よう。著者の仕事は完成を見ずしてしまつたけれども、その烈々たる究學の氣概と、天才的な思索の跡とは、向後に於ける研究を、いやが應でも掻き立ててゆくに違ひない。著者の行論を肯ふと肯はざるを問はず、それは生と學との聯關に深き反省を喚び起し、向後に於ける實のり多き研究の地の鹽となるべきものと敢て信じたのである。

尙ほ最後に一言附け加へて置きたい。主たる論稿と共に収録されてゐる隨想風の論文も、仲々に捨てがたい味はひを持つており、著者の體験の深さと幅ゆきとを充分に示してゐる。讀者はこれ等の論文に於て、著者の立場の却つて具象的な鮮明な表現を見出すことも出來よう。生に沈潜し、生を深く生き貫かうとしたこの青年哲學者の隨想に、ゆたかな息吹きを感じられるのは不思議でない。その表現も仲々美しい。後期の著者は、文

章道に於ても、ひとかどのスタイリストであつた。

猪谷善一著

『日本貿易論』

大泉行雄

猪谷善一教授の學位論文「日本貿易論」(最近日本貿易の伸展に關する實證的研究)は、全卷五百頁に垂とする一大勞作である。しかも、其の周到にして精微なる統計的分析と、思想史を背景とする理論的檢討とは、氏の業績に幅と厚味とを與へ、局限せられた紙幅の中に、之を紹論することは、容易ならぬ仕事である。若し、卷間、往々にして見るが如き、目次紹介を以て此の書評を始めるとしたら、僅かにその羅列だけをもつて、與へられた紙幅の過半は失はれるであらう。こゝでは従つて個別的・特殊的諸問題にまんべんなく觸れる立場をとらず、大局的觀點に立つて、氏の業績を評價することにより、この書の地位を明かにしたいと思ふ。この目的のために、私は二個の規準をかゝげるであらう。

ひとつは、この研究によつて、何が成し遂げられたかといふ